The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜新刊・翻訳紹介＞ベアトリス・アンドレ・サルビニ著 斉藤かぐみ訳 『バビロン』 / 森田安一編 『日本とスイスの交流　幕末から明治へ』 / 藤川隆男編 『白人とは何か？ー ホワイトネス・スタディーズ入門ー』
Author(s)	佐野, 克司; 森本, 慶太; 木谷, 名都子
Citation	パブリック・ヒストリー. 2006, 3, p. 94-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベアトリス・アンドレ・サルビニ著
斉藤　かぐみ訳
『バビロン』

文庫クセジュ、2005 年 7 月刊、145 頁、
951 円＋税、ISBN4-560-50889-5

バビロン、その名を聞けば誰もが旧約聖書「創世記」に記述されているバベルの塔の伝説や、世界七不思議のひとつに数えられるネブカドネツァル 2 世の空中庭園を漠然と思い浮かべるであろう。しかしながら、古代メソポタミア世界に存在した、この偉大な都市バビロンの実態については、一部の専門家の間にしか知られていない、というのが現状である。本書は、一般的にほとんど脚光を浴びることのない、3000 年もの長きに渡って継続した古代メソポタミア文明の歴史にあって、前 2 千年紀前半以降、常に偉大な文化的、宗教的都市であり続けたバビロンの実態を、詳細に解説している書物である。

第 1 章「われわれの史料」では、バビロンの歴史を研究する上でもっとも重要なメソポタミアプロパーの楔形文字史料の残存状況やその性質、および時間的・空間的に異なる聖書史料、古典史料、アラビア語史料がどのようにバビロンの様相を伝えているのかについて簡潔に説明している。またさらにバビロン発見の経緯やその後の学術的発掘がこれまでどのように行われてきたかが語られており、大変興味深い。第 2 章「バビロンの歴史」では、その起源から新バビロニア帝国の滅亡までの歴史が通時的に語られる。一見、バビロンというと、非常に長い期間、単一民族によって支配されていたような観があるが、実際には、数多くの異民族による王朝交代があり、破壊と再建を繰り返した歴史的事実がうかがわれる。そして、もっとも多くの紙幅を裂いて論じられているのが第 3 章「ネブカドネツァル 2 世時代のバビロン (前 605-562 年)」である。著者自身も述べているように、都市バビロンについての理解を深めるためには、必然的に史料のもっとも豊富な時期に焦点を絞らざるをえない。それゆえ、本章ではネブカドネツァル 2 世の治世を対象に、王碑文をはじめとする一次史料や発掘報告書を主体的に用いて、ジッグラトや空中庭園などの魅力的な建造物を、人々の生活、宗教、王権、宇宙観などとともに相関的に解説しており、最盛期のバビロンの様相を色鮮やかに描き出すことに成功している。最後に、第 4 章「バビロニア文明の終焉」では、新バビロニア滅亡後、異民族の支配を受け、最終的に歴史の彼方に消えていくまでの軌跡をたどっている。

イラク戦争時における文化財の略奪事件はいまだ記憶に新しい。この人類の歴史に対する忌むべき行為は、日本のメディアでも大々的に取り上げられ、世間の注目を浴びた。しかしながら、文化財の重要性に対する認識は高まってきてはいるが、われわれが生活している日本とは時間的にも空間的にもあまりに隔たりがあるため、現実に略奪の対象となった古代メソポタミア文明の遺物が具体的にどのようなものであるのかについての理解は、まだ人々の間にほとんど浸透していない。そのような状況にあって、本書のような一般向けに書かれた書物が翻訳されたのは時宜にかなっており、また大いに意義のあることであるといえよう。

(佐野克司)

森田安一編
『日本とスイスの交流　幕末から明治へ』

山川出版社、2005 年 6 月刊、四六判、160 頁、
2400 円＋税、ISBN4-634-64012-0

本書は、2004 年 10 月に日本女子大学で行なわれ

たシンポジウム「幕末･明治の日瑞交流をめぐって」の報告書である。幕末の 1864 (文久 3) 年 2 月、日本とスイスは修好通商条約を締結した。このシンポジウムは、条約締結 140 周年を記念して開催されたものである。本書には日本側から 5 名、スイス側から 2 名がそれぞれ寄稿している。寄稿しているのは、スイス史や日本史、民族学の専門家ならびに日本時計輸入協会理事長という多彩なメンバーであり、本書の中身を豊かなものにしている。

森田安一「幕末・明治期の日本・スイスの交流をめぐって」は、本書全体への導入として、条約締結から明治初期の日瑞交流の流れを簡潔にのべる。あわせて、交流のさきがけとなったツィザトらの日本紹介記や 19 世紀初頭に日本へ初めて上陸したスイス人ホルナーについてふれている。イェルク･フィッシュ「帝国主義と平等性のあいだ――国際法のグローバル化と一九世紀における日瑞関係」は、日本がスイスと国交を結ぶ際に、スイスを一国としてではなく、文明化された「西洋」という枠組みの中でとらえたために、列強諸国と同様の不平等条約を結ぶことになったとする。この条約の交渉過程について、スイス全権使節エメ・アンベールを中心に論じるのが、中井晶夫「日本・スイス交流の誕生過程」である。国交樹立後、明治時代にはいると日本政府は新たな国家像を探るべく岩倉使節団を派遣する。田中彰「岩倉使節団の見たスイス」は、久米邦武編集による報告書『米欧回覧実記』から、使節団のスイス観を考察する。その客観的記述からは、「小国主義」という明治日本がとりえた「大国」とは別の選択肢がみえてくるとされる。フィリップ・ダレス「ホルナー、アンベール、そしてその後――人類学的視点におけるスイス人の日本像」は、最近発見された日瑞交流にかんする新史料から、スイスにおける日本像を論じたものであり、今後の研究の進展が期待される。19 世紀末におけるスイス人の日本像を扱うのは、踊共二「スイス絹商人ハンス・シュペリの見た明治の日本」である。そこからは、日本社会の成長を予見し、日本の伝統文化を正確にヨーロッパへ伝えようとした、観察眼の鋭いスイス人の姿が生き生きと浮かんでくる。小谷年司「スイスと国交の始まった頃の時計産業」では、スイスにおける時計産業の発展過程について描いており、日本と条約を締結した頃にスイスでは時計産業が繁栄を迎えつつあったと指摘している。

現在では多くの日本人がスイスを訪れる。しかし、研究の蓄積も深い日蘭交流史などにくらべて、日本とスイスの交流史について知っている人はほとんどいないであろう。森田氏をはじめとするスイス研究者は、この知られざる側面に焦点を当て、すでに日本人のスイス像について、貴重な成果をあげている (森田安一編『スイスと日本――日本におけるスイス受容の諸相――』刀水書房、2004 年)。本書は、条約締結についてのみならず、スイス人の日本像にも対象を広げているのが大きな特色である。文章は全体的に平易で簡潔にまとめられており、一般読者の関心にも十分応える内容となっている。一読をすすめたい。

(森本慶太)

藤川隆男編
『白人とは何か？
― ホワイトネス・スタディーズ入門 ―』

刀水書房、2005 年 10 月刊、257 頁、
2200 円＋税、ISBN4-88708-346-7

「白人とは何か？」本書のタイトルでもあるこの問いかけについて考えたことのある人がどれだけいるだろうか。最初から当然の前提とされてきた存在を改めて相対化し、研究対象としてその位置づけを再考するということは、分野を問わず意義ある試みであろう。本書は、これまで普遍的存在としてとらえられてきた「白人」を個別的な存在としてとらえ

なおし、歴史学のみならず広く人文・社会科学研究における有益な分析視角を提供しようとした成果である。

本書の内容構成は以下のとおりとなっている。

1 白人研究に向かって ― イントロダクション
第Ⅰ部　白人研究の「見取り図」
2 白人性の探求――白鯨を追って
3 白人性と世界構造――二つの白人性
4 白人性と表象／ジェンダー――先人の遺産
5 白人労働者階級の形成――下からの歴史
第Ⅱ部　白人の形成
6 白色人種論とアラブ人
――フランス植民地主義のまなざし
7 ヒムラーのアーリア人種観とその帰結
――親衛隊による「血の選別」
8 アメリカにおける白人の形成
――先住民・アフリカ人・移民の交錯
9 オーストラリアにおける「白人」の創造と大英帝国
――一八七〇年代から一九〇一年までを中心に
10 もう一つの北米社会
――二〇世紀初頭のカナダにおけるホワイトネスとブリティッシュネス
11 「白」と「茶色」の間
――南アフリカにおける白人形成
第Ⅲ部　白人の投影
12 歴史としての白人像
――オーストラリア先住民のオーラル・トラディション
13「ドミナントな白人性」を越えて
――近代日本の二つの顔
14 白人とネイティヴのカテゴリーをめぐって
――ドイツ統治下のサモア
15 宣教師たちの諸相
――キリスト教布教の現場に見る白人性
16 野蛮なヨーロッパ
――近代歴史認識における十字軍像の変容
第Ⅳ部　白人性の展開
17 映像文化と白人性
――テレビのなかの民族とイメージ
18 多文化主義のなかの白人性
――オーストラリアの多文化主義論争から
19 家族計画援助と白人性
――強制された近代家族
20 死者たちの白人性
――オーストラリアにおける戦争の記憶と「国民」の境界
21 「白人であってそうでない」者たち
――イギリスのインド支配と白人性の境界

このように本書は21章からなっており、冒頭のイントロダクションでは、「白人」「白人性」とは何か、という疑問を問いかけることによって、以下の二つのことが主張されている。第一に、これまで多くの研究が当然の前提としてきた「白人」という存在を歴史的・社会的存在としてとらえるべきであり、「白人」とは普遍的存在ではなく地域や時代によって変化する存在であるということ。第二に、「白人」という存在が社会関係のなかで歴史的に変化するものであるならば、その存在は白人の身体と必ずしも一致するものではなく、したがって「白人性」も白人の身体と切り離して考えることの可能性あるいは必然性が生じてくる、ということにある。

第Ⅰ部（第2章 - 第5章）では、これまでの白人研究の理論的背景が解説されている。その際のキーワードとして、啓蒙主義、世界構造、ジェンダー、表象、階級（労働者階級）がとりあげられており、これらの概念と関連づけて白人・白人性研究史の整理が行なわれている。続いて第Ⅱ部（第6章 - 第11章）では、白人世界、ヨーロッパとその定住植民地を起源とする国々における、白人の形成過程をたどることによって、歴史的存在としての白人のさまざ

まな様相が示されている。

第Ⅲ部（第 12 章 - 第 16 章）では、非白人から見た白人像、非白人世界における白人性の問題が論じられている。分析視点を第Ⅱ部とは正反対ともいえる位置におくことによって、これまでの主流の白人研究、すなわちアメリカ・ヨーロッパを中心とした白人研究に対するアンチテーゼが提示されていると同時に、歴史的存在としての白人の様相が第Ⅱ部とは異なる視点から示されている。第Ⅱ部と第Ⅲ部は表裏一体ととらえてもよいのではないだろうか。最後の第Ⅳ部（第 17 章 - 第 21 章）では、イントロダクションにおける第二の主張と関連して、白人という身体を離れて拡散する白人性について論じられている。テレビ、多文化主義、バース・コントロールといった現代世界に広がる普遍的な文化を通じて、白人性とは何か、という問いに対する回答の提示が試みられている。

「白人」が歴史的に変化する存在であるならば、「白人性」についての理解も地域や歴史的背景によっておのずと異なってくると考えられる。本書は、それぞれ異なる分野を研究領域とする 17 人の研究者によって執筆されているので、「白人とは何か？」「白人性とは何か？」という問いに対して 17 とおりの見方が提示されているといえよう。共通のテーマに対しあまりに多くの見解が述べられているために読者は混乱をきたすかもしれない。しかし本書は、「白人・白人性」を事例として複合的・学際的研究の新たな可能性を提示するとともに、普遍的存在とされてきたものについて疑問を投げかけそれを相対化する姿勢を示すことによって、我々の視野を広げ、新たな研究視角を見出す契機を与えてくれる刺激的な書である。

なお、この本の詳細については以下のウェブページから知ることができる。

白人とは何か（http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi）

（木谷名都子）